

懇談会「国土計画考」 - その15 -

出席：今野修平氏・国土計画研究会メンバー

日時：平成19年3月20日（火）

場所：ホテルプレジデント青山「ファンクションルーム」

A氏 では、「国土空間論」からお願いします。

今野 今日にはメモを持ってきていませんが、国土空間論で過去の論理展開がどのように行われてきたかということと、近代国家というのを世界が認知するようになったのは、基礎に国民と国土が明確であるかどうかです。それが不明確だと近代国家としては世界が認知しないことになっていますものですから、国土が不明確なるがゆえに苦労したのがイスラエルとパレスチナです。領土が決まらないということですし、それから、イラクやトルコのほうのクルド民族というのは人数的には2,000万以上いて、特有の文化と経済圏を持っていますけれども、トルコもイラクもイランも空間を認知しないんです。少数民族として抱え込むという政策をしているものですから、世界が国家として認知できないということで、アメリカの今度のイラク侵略のときにもちょっと使われてしまって、アメリカ政府がクルドを支援した時期がたくさんありました。それに伴う小さなゴタゴタは各地にありますのを、陸続きでみているロシアは領土は絶対に離さないということで北方領土もその例ですね。

2番目に、「Lebens Raum」という思想が一時ありました。ドイツ語でLebens Raumは直訳すれば「生活圏」ですが、ヒトラーはドイツ系住民の居住区は大ドイツ主義の基礎であるとして侵略戦争の口実にし、大問題になったものですから有名になったのですけれども、空間というのは、そこに住む人の国家権力に対する帰属意識だというのが最も純粋な学問定義です。したがって東北というのはどこかといったときに、原点は大和朝廷の勢力圏と非勢力圏の境界までが空間的な国家の範囲でここから北が非日本だとかなり、これを受け日本に組み入れられた後、勿来の関と白河の関があってそれ以上が東北なんだとなりました

たが、今日ではそうではなくて、そこに住んでいる人が東北という社会だと思えば東北、というのが極めて客観的な意味の地域形成論の基礎にあるわけです。

そういうことを考えると、ドイツ人のためのドイツという空間、Deutschlandというのとは何か。この問題を正面に打ち立てて世界に挑戦したのがヒトラーなのです。ヒトラーは「ドイツ人のためのDeutschland」ということを言いまして、その結果、バルト海に点々と、かつての歴史を背景にドイツ人が住んでいた交易拠点の都市国家があります。一番北はそれこそサンクトペテルブルクの首根っこにあるラトビアやバルト三国から現在のポーランドの臨海地帯をドイツだ、こう言い出したのがヒトラーで、侵略戦争の基礎にしたわけで、そこをドイツにしました。現在なおドイツ人がまだ主流でドイツ語をしゃべっている地域、つまり昭和1ケタ時代、この生活圏を権力主体のドイツ帝国に組入れて、ドイツは飛び地的に領土をバルト海に持つ形になっていった。その次にドイツ人と多民族が混住している地域に手を出してきた。それがオーストリア併合です。ウィーンへ行けばわかりますように、オーストリアは言葉もドイツ語です。一度、ウィーンの郊外に行ったときにこういう案内をされたことがあったけれども、あそこに見える集落はドイツ系の人たちの集落です、こっちはスラブ系の人たちの集落です、こっちは南方系です、と。それによって音楽とか宗教、民族衣裳が違うんですね。そこの面白さを突いたのがポルカであり、シュトラウスのウィーンクラシックなんです。ウィーンとチェコスロバキア、特にチェコのところはのみ込んで大ドイツ帝国になっていった。

本来、Lebens Raumという学問的な定義は、非常に科学的であって客観的に定義が論じられる考え方だったのが、ヒトラーがこれを使うことによって、Lebens Raumは第二次大戦後は使えなくなって、宙に浮いた形になっている。学問的な論議をするとなると一番重要な中心的な定義が宙に浮いた形になっている、こういうことになるわけです。

その背景にはヨーロッパを中心とした近代国家形成の歴史があります。都市国家をベースにして、科学技術が発展してきたことによって、軍事部門ではダイナマイト発明以降非常に強力な大砲が出現しまして、都市国家が成り立たな

なくなってくる。それで、民族を単位にして国家を考えようではないかという、ネーションの考え方が出てきた17世紀後半以降の背景と絡むわけです。したがって、ヨーロッパを中心とした（アメリカも含めまして）国家権力の執行空間に置きかえた形で考えていくようになっていった。

日本の場合はそれが直輸入で、地方の権力執行空間が不明確なまま明治維新政府が誕生した。しかも、それは司馬遼太郎に言わせれば、国民世論をつくり上げるマスコミより早くそれができてしまったということもありまして、このところは議論がちょっと残っております。どういうふうにそれを理解して、修正しつつ、ノーマルな国家論を日本列島に展開していくかという課題です。それがないと実は論理的ではないんです。

いままでの国土計画はある意味で暫定的な答えを置いていまして、本来は定義が違っても、イコール国際法上の定義である「領土」に置きかえていた。しかも日本の場合は、領土に置きかえて誰も疑問を呈してこないということがありました。したがって、このところは揉まれていない。そういう問題を内包しながらいたのですが、領空、領海、この2つの問題で、それまでの国家権力執行空間が揺らいでいるということが言えます。

領海は、ダイナマイト以来の武器が発展してきたことと絡みまして次々と大きくなっていったわけです。つまり、海洋は国家権力の及ばない全体のための「公海」という概念が、最初に世界が近代化の中で出てきた海に対する位置づけで、それはベースにあるわけです。しかし、公海を航海している外国船・軍艦が持っている大砲で簡単に沿岸部を攻撃できるというのは、国土を防衛できる基礎条件が成り立っていないのではないかという議論から、次第、次第に公海の幅が広がっていくわけです。

明治時代、日本に近代国家ができたときの公海の問題は、世界じゅう三海里でした。ところが、巨艦・巨砲時代にどんどん入っていくに従って三海里が次々と大きくなって行って、いまや二百海里問題というところまで行きました。したがって、国土空間の中での海洋空間の位置づけがそういう固定的な国土概念を揺るがしている要因の一つになっています。

日本では、ようやく今国会に「海洋基本法」を議員提案で提出することになりました。議員立法ですから細かい条項は出ていないのですが、世界の近代国家の中で、海洋に対する自己権限も何も日本が一番遅れていますから、そこを見抜いて中・韓との間に係争が生じていますし、北方領土付近でもロシアはそこを見抜いた行為が続発しているわけです。

A氏 海洋基本法というのは所管は何省ですか。

今野 基本法の一環の主張としては内閣官房が持つべきだと言っていますが、もちろん、当然、実務としては国土交通省が相当負担があります。海上保安庁まで持っていますからね。

A氏 防衛省ではないのですか。

今野 防衛省だけではありません。外務省もかかわりますし、農林水産省もかかわります、環境庁も環境行政として非常に深くかかわります。したがって、1省的な縦割りの領域ではなかったために、いままで、日本では通せなかったわけです。

私が現役の頃は、だいぶ整理してくれたのかもしれないけれども、各省庁にみんな海洋室というのがありました。縦割り行政の弊害をものに出して、対応しきれないでいた領域なんです。これが戦後50年たってやっと基本法を出して、海洋基本法を批准する第一次体制が整うというところに来たわけです。

しかも、みっともない話が、それを推進したのは政府ではなくて「日本財団」です。だから、その勉強会は日本財団がカネを出してやってくれまして、外国のパネラーが来るのも全部日本財団のカネでやっていたものですから、彼らは日本政府に挨拶にも行かないで、インターナショナル・パネルディスカッションに出てきて、そこに隠れた形で名前を登録している私なんか案内状が来るのです。ここのところはちょっと盛り上がっていますから、月1回ずつ会

合がありますけれども、そういうような状況です。

したがって、この問題について国土計画がちゃんとした姿勢を出すべきではないかといった意味で、初めて乗り込んだのが三全総だったわけです。それまで海洋については触れもしなかったのです。

A氏 国土の中に海洋は入っていないということですね。

今野 そうです。それが揺らいている問題の一つです。

もう一つは宇宙兵器の開発とジェット機です。平面的に見たときに領土・領海はいいですね。ところが、ジェット機ができて1万メートル以上の高空をバンバン飛行機が飛ぶようになって、そこは領土・領海を所管する国家が対応できるのかというと、できなかったわけです。できなかった最も典型例は、B29の日本に対する攻撃のときに戦闘機も高射砲も届かないんです。それから第二次大戦後、その空間を使って軍事行動を拡大したのは有名なアメリカのU2機です。これは2万メートル上空を飛ぶ飛行機を開発しました。そのあとを引き継いだのは人工衛星なんです。次々と拡大した。それで、民間機の領空通過については、通過料というのが定着して一応落ち着いているのですけれども…  
…。

B氏 あれは高度は決まっているのですか。

今野 高度というより航空管制を受けて管制に対するサービス料を払う形で定着しています。

B氏 航空回路にかかわらず。

今野 いえ、1万メートルのところだと払いますね、空気がまだありますから。日本は経済では、例えば韓国に追い立てられ、北京に追い立てられていま

すけれども、あの飛行機は日本領空を横切らないとアメリカへ行けないです。だから、あそこが経済発展することによりまして自動的に日本政府に払う領空通過料はどんどん増えているんです。管制を受けますので回路は固定化します。

日本のヨーロッパへ行く飛行機がアンカレッジからモスクワ経由に変わった理由も、それなんですよ。ロシアだから領空通過料が安く近距離になった。日本の人は知らないけれども、アメリカは高いんですよ。着陸料も加わりますし。

**A氏** 那覇の管制官が管制しているところの端っこに、いま、飛行機の通行量が随分多いんですね。あれは通行料を払っているのですか。

**今野** それが二百海里問題と絡むわけです。それを垂直に延ばしたのが領空になりますから。それを飛び越えてミサイルは飛んでいます。人工衛星も飛びます。これについては文句をつけられないんですけれども、ジェット機の場合はそこを横切っていくから通行料を払うわけです。その代償としてはナビゲーションに対する補助（管制）をちゃんとやるということになっていまして、一般には航空交通というのは空港ばかり議論されていますけれども、ナビゲーション・ステーションがどこにあるかということによって航空路が決まっています。

例えば、一番ない北太平洋でも、千島列島の南側というか東側に民間航空機が飛べるルートが4本設定してあります。アメリカや、アンカレッジ経由で他へ行くのとか、アメリカ大陸とアジアを結ぶものはみんなその4本を飛んでいます。灯台を設定できないところはポイントを設定して、そのポイント通過を報告することになっています。「何時何分、どういう方向に飛んでいます」と。それによって陸上では安全をチェックしています。

これは狭い日本列島でも多重にありまして、大阪から札幌へ行く飛行ルートも交わりますし、大阪からヨーロッパへ行く便もそれを抜けて新潟から北へ行くんです。ところが、能登はその先（約100キロ）にありますから、能登と佐渡を結んで、その上を通過して、新潟の上から東京の北に入って茨城県の大子

通って羽田へ来ているんです。

A氏 ああ、グルッと回っているんですか。

今野 そうです。南はいっぱい混んでいるから、そっちのほうが入りいい。それを図面に落とすと、日本列島にも何本か飛んでいるルートがあるんです。それが読み取れるようになるには、相当な航空運賃を払った人でないと読めない。

B氏 例えば、米軍の持っている航空回路みたいなものは。

今野 それはあります。それから空間、訓練空域もあります。だから、民間機はそこは避ける。

B氏 これからの議論かもしれないけれども、日本の領空という問題からすると.....。

今野 日米安保条約で日本がその空間を提供しているのですが、権利上は立体空間として決められております。米軍が入れるのはこの空間、演習できるのはこの空間ということで。

D氏 飛行機のポケットに入っている航路は違うんですか。

今野 僕がいま話したことを読み取るには、相当の航空運賃を払った人じゃないと読み取れない(笑)。

D氏 あれは一応正しいのでしょうか？

今野 正しいけれど、平面的に描いてあるからね。

D氏 ただ、目的地に真っ直ぐではなくて、何か途中でこういう感じ描いてあるじゃないですか。明らかに降りないところなのに。それをおっしゃるんですね。

今野 そうそう。話は変わりますがけれども、航空路もものすごく混んでいる交差点と、空いている交差点があって、東日本で我々が常に空港開発のときの議論で念頭に浮かんでくるところは、日本海岸では新潟の沖にあるポイント、これはものすごく混むんです。日本列島を南北に動くものと、成田から飛び出て行ってヨーロッパに行くのが交差するところですね。それから、東京近辺で有名なのは大島です。あとは潮岬。

A氏 今度、空域が600から300に縮まったでしょう。

今野 いま、話としては平面的に話しましたけれども、立体的なんですよ。その結果、横田を事例にすれば、横田に進入してくるには、どういう風で、どういう方向で入ってくるかというのがありまして、それがいままで必要以上に壁として大きかったし、上が少しあくことになったので容量ができたということです。

それを平面に落としますと、関東地方が航空のマーケットがオープンスカイにできない最大の難点は、ブルー・フォーティーンと言いまして、厚木空港、旧立川空港、横田空港、入間の自衛隊基地、東西交通が多い中をこれが一線上に並んでいるのです。戦後、占領されたときにそれをアメリカに一番先に取られたんです。それと23区の上を飛ばないという制約もあり羽田、成田への出入路は限定されてしまっている。

それは、飛行機が上空の水平飛行から降りてくるときに、4本のルートが並行して降りてくる形になる。一番上を飛んでいるのは入間に降りる。2番目が

横田に降りる。3番目が立川に降りる。4番目が厚木に降りる。こういうことなので、3番目の立川は返ってきたんですけど、とにかく上と下を押さえられているから東西交通にとって大きな壁となるんです。

これを飛び越えて行かなくてはならないものですから、羽田空港から飛び立った飛行機はこれの上を飛んで - - 最近、ようやくアメリカは管制権をよこしましたから - - 行くのですが、一遍に上がれないですから、そこで羽田を出てからグルッと東京湾を回って高度をとりつつ上がるわけです。したがって水平距離からいくと、西に行く飛行機、これは北京、福岡、非常に太い線ですが、これはグルッと飛んで高度を稼いで西にいきます。

それがこの壁を低いところで抜けられれば、時間も速くなるし、急角度で上昇しなくていいですから燃料も安くて済む。これが「西の壁」と言われているものです。

ところが、これは軍事的な壁で、地形的な壁もあるんですよ。ちょっとびっくりされるかもしれないけれども、西に行くときは、富山空港に行くのも能登空港に行くのも八王子の上を通過して行きます。松本の上を通過してアルプスを越えて行きますが、アルプスが高過ぎるために富山空港に降りられないんです。したがって、富山に行く飛行機はアルプスを越えて富山湾の上空に出て北から入るんです。こういうふうにアプローチを稼いでいるわけです。だから飛行ルートキロ数をやってみると、能登空港のほうが短いです。東京に近い。能登空港は距離がありまして、そのまま入れますから。そういう軍事以外の要因もものすごくあります。

それから、富士山も高いでしょう。しかも、孤立峰でしょう。そうすると気象がものすごく乱れるんです。近寄れないのです。地図上では、富士山の上を通過して行くのが東京から大阪、大阪から東京へ来るのに一番近いですけども、山体の大体2倍の高さまで影響を受けるんです。だから、富士山の真上だと8,000メートル以上は上にならないと危なくて飛び越えられない。それがみんな大島に詰まってくる大もとなんです。

A氏 そういふことですか。羽田から西へ行くのを、もう少し真っ直ぐ西に行って、富士山の横をかすめて行けばいいのではないかと常に思っていたんです。

今野 ええ。保険会社だけが儲かる社会になる。それをサービスとわきまえてやって、大墜落事故を起こしたのが有名なBOACなんです。世界の中で日本に来る人がまだ珍しかった頃、世界最大の富士山をお見せしてシンガポールへ行きますと寄って。

A氏 ドーンとあそこでエアポケットなんですね。

今野 孤立峰に風が当たると渦を巻いてますからね。そういう意味では地形的にも、富士山よりアルプスみたいにつながっている山のほうが扱いやすいのですが、それでもやはり高さは2倍要りますから、アルプスを回するには6,000メートル以上。そうすると富山には近すぎて降りられない、こういう話になるわけです。

D氏 私は騒音問題だと思っていました。

今野 騒音問題ももちろんあるけれども、航空路の設定というのは、そういう権力上の問題とか、騒音問題とか、地形上の問題とか、気象上の問題とか、安全上のルートの問題とか、いろいろなことが絡まっているわけです。

例えば、ロシアがソビエトのときに財政が窮しまして、日本に離発着する飛行機をロシア上空を飛ばしてカネを儲けようと発想したんです。ただし、そのときにはロシアの軍事基地がどこどこにあるかと分布図をつくって、その外側は許したけれども、その代わり外側に航空灯台をセットして - - 航空灯台にも何種類もあるのですけれども - - そこを飛びなさいと。したがって、ハバロフスクの先を通過して行くルートは、下を見れども見れども、都市が見えないとい

うルートなんです。それで真っ直ぐモスクワに入る。

A氏 中国山脈というのはそんなに高い山はないけれども、あそこはものすごく気流が悪いですね。米子～大阪便なんていうのは……。

今野 中国山脈は高さは低いけれども、小型機、特にプロペラ機になるとあまり上がれないですから、3,000メートル以上のところがちょうど航空の交通領域になるんだけど、中国山脈はそれでも高いところは1,200とか1,500ありますから、そうすると3,000メートルぎりぎりなんです。

そういうようなことで、領空が世界の人類にとって日常生活にまで入ってきてしまったものですから、それが国家支配の空間というものの理論をいろいろ怪しくしている。いま、ハブ空港論でも素人的に騒ぐ人がいっぱいいますけれども、やっぱりそれと絡むんです。マイアミがなぜハブになったかというのは、ヨーロッパから南米に行くルートが圧倒的に多いですから。石油の供給基地を求めていることもあって、フロリダ半島で給油して行くのがいいからという条件があったから、マイアミ空港もオーランドの空港もハブになったわけで、そんな単純な話じゃないんです。

A氏 航空の空域の国際的な交渉というのは航空局でやっているのですか。

今野 そうです。

A氏 各国、航空関係のセクションでやっているわけですか。

今野 そうです。「航空交渉」ですね。大体、現在の近代国家の体制をきっちりとっている先進国の中で、運輸省というのはどこでもありますけれども、運輸省が持っている権限はひと言で言うと国際交通なんです。鉄道についても道路についても航空についても、国際交通の領域は中央政府、そして国内はロー

カルなんです。

それを日本の国土交通省は、過疎地のバス停の認可までやるわけです。そこが中央集権型でして、港湾の単純な比較をやっていても本当はあまり意味がないのです。ドイツでは連邦政府がつくる港湾施設というのは航路と防波堤と、はっきりしていますし、埠頭と埠頭用地はつくりません。それは州政府なり管理者がやる。国際問題に絡むところだけを中央政府が所管する。そういう意味で国際交通が利権化しているところは、航空交渉が2国間交渉で、相互の国の航空会社の乗り入れ権限を平等にとるためです。この規制をはずそうというのがオープンスカイです。

話はちょっと脱線しましたがけれども、2番目に挙げておいたのは、特に中国がすぐ隣で大きくなってきているので、それを極めて強く認識して統治圏域外の周辺空間をどう考えるかということがあります。中国の基本哲学は中華思想ですから、したがって日本もそれに応じた考え方をしなければいけないわけです。日本という国家が近代国家で、マスコミやテレビでは中国と対等の制度と権限を持っているといっても、中国側から見ると、日本の統治者というのは長い2000年の歴史の中での王にすぎないわけです。帝(天子)は中国にいるわけです。

だから、小泉さんが中国に行かないこと自体が帝に対する反逆なんです。王は帝に対しては朝貢しなければいけない。しかも日本の歴史を振り返ると、偏った歴史教育だけど、王の立場を明確に出して付き合っただけで財政基盤にしていたというのは、足利政権がまさにそれなのです。国内の生産はちっとも上がらないのに、足利政権は金閣寺や銀閣寺までつくれて、贅沢をして、あの時代に日本の文化が、お能にしても和服にしても何にしても立派なものになりました。みんな日宋貿易なんです。日宋貿易に対する文書をチェックしてみますと、日本国王足利何々と書いてあって、ちゃんとサインしているんです。

A氏 でも、最初は認められなかったそうですね。最初は義満は認められなくて、おまえは国王の臣下だと。

今野　そうです。天皇（王）の臣下として何十年も我慢した。

A氏　一生懸命自分を認めさせて、金閣寺も中国の使節団を受け入れるために……、だから、明治時代の鹿鳴館と同じようなものじゃないですかね。

今野　ただ、中国の天子の概念は、世界で許されるのは天の子はただ一人なんです。その下に王がいるわけです。王は幾つあってもいいんです。この天子と王の関係というのは、必ずしも縦の、例えば階級組織の大將と中將、少將という関係ではないんです。したがって天子は王が朝貢してくれば、もてなして、必ず土産物は持たせるという思想です。

この辺の思想は、琉球地方史を勉強するとある意味で忠実に出てきます。沖縄の考え方というのは琉球王なんです。藩主じゃないんです。藩主だとは誰も思っていない。琉球王だけれど、「王は二人の天子に仕えず」ではなくて、日本の天子にも仕えたわけです。両方にお土産を持って行ってよろしくやっていたわけです。だから日本では、琉球は日本領だと思っている。

B氏　中国にだけやっていたのかとっていました。

今野　違います。琉球と朝鮮は日本に朝貢してきていました。通信使ですね。沖縄は朝鮮よりもっと来ていましたから、それが民謡に残っているわけです。残波岬を越えればやまとんちゅうが何とかかんとかという歌があります。それは江戸に送る使者の歌なんですね。

そこで私は、中華思想を日本は国民から総理まで勉強しなければいけないと。特に国土計画なんかそうだと思うんです。その裏手をどのように使うかということが大事と思っています。

A氏　裏手というのは？

今野 相手はそう思ってこっちに臨んでくるわけですから、それをどういふふうに逆手に使うかということです。逆手を使ってうまくいったのは、小泉さんが突然平壤に行ったために、相手は「王が天子のところに来たか」と思って、曾我ひとみさんなんかを返してくれたわけです。あれは土産物なんです。

ところが、安倍さんは来ないものだから金正日はカッカッしているわけです。北朝鮮なんていうのはこの概念の中で、中国に最も近い国で、日本はその外です。だから、こっち（東夷）に行けば行くほど野蛮度が高いわけです。彼らは全く北京と同じ見方で日本を見るわけです。中国に対しては媚びへつらうけれども、日本に対しては、野蛮国家とどうつき合うかというのが北朝鮮外交の基本です。それなのに拉致を片づけないうちは石油をやらないと言っているものだから、話が進まないわけです。

A氏 中華思想というのはいつ頃出てきたのですか。

今野 これは古代からです。

A氏 中国建国以来の。

今野 そうです。この考え方を国土に置きかえると、「中原」という言葉があるでしょう。我々は原の中にいる、こいつらは海の外だというわけです。で、日本は東夷ですね。ベトナムは南蛮でしょう。それから北狄、西戎ですね。東夷には王は許可する、その東夷のやつらが本土に来て南京大虐殺なんて起こすから許せない、歴史問題がわかっているのか、こう言ってくるわけです。論理的といえば論理的なんですね。ヨーロッパではこれに近い思想はフランスです。フランス中華思想と言います。こういう基本的な関係が少なくとも歴史の中ではあって、その中で日本の国土とは何かということを考えなければいけないわけです。

しかも、中国や朝鮮半島の立場に立って、自分が朝鮮人あるいは中国人だっ

たら、日本を目の敵にするだろうなと思うんです。日本列島というのは3,000キロにわたってユーラシアを包囲しているのですから、どうしようもないんです。あれを突破しないと西の世界にも南の世界にも行けないんですもの。

だから、地政学的には日本はこの思想と全くぶつかり合うけれども、いい位置の中に花綵列島は琉球弧と本州弧でガチッとあるわけです。不沈空母というのもそのためです。そういう見方をすると、千島列島を第二次世界大戦で離してしまったのは非常に怖かった。あれを離さなければロシア潜水艦隊に世界が脅かされることもなかったのです。アメリカはそこを読み間違ったわけです。

A氏 中華思想を前提にして、日本の国土をもう一回そういう目で、そういうことも含めて考えるべきだということですね。

今野 中華思想を容認してという意味ではないですけども、相手は民族的思想の根拠をそう見てくるから、それを前提にしてどういうふうにつき合うか、ですね。もちろん、押すところは押さなくてはならないです。

だって、対中技術援助（ODA）を、JICAの委員長みたいなのをさせられてつき合いましたけれども、腹立たしい思いがいまだにありますよ。

A氏 今度の国土形成計画で東アジア経済圏というのを随分絵を描いていますがけれども、こういうことを意識して書いているんですかね。

C氏 ここまで深い思想があるかどうかわかりませんが、ただ、国土計画で言うところの東アジアは完全に経済交流ということではないですかね、意識しているのは。そういう文化的あるいは歴史的な経緯をむしろもう忘れて去って、いま成長極である中国にどうやってアプローチできるか、ということになっているのではないのでしょうか。

A氏 いまNIRAで、「北東アジア軸」ということで随分いろいろやってい

ますね。日本からウラジオストックまで1つの軸で、エネルギー軸と観光軸とあって、そういう絵を描いています。中国がそういう思想だとすると、自分のところをかすめて何か変な絵を描いてるなというふうに思っているのかもしれませんがね。

今野 ええ。

C氏 韓国なんかは、北京(Beijing)とソウル(Seoul)と東京(Tokyo)で「BESETO(ベセト)軸」とか言って、そこをつないで経済交流をするのがアジアの発展のためにという提案はしているんです。まあ、EUの「青いバナナ」を真似しているのだと思うんですね。

A氏 戦前の日本の弾丸列車といいますか、あれは北京まで延ばすつもりだったわけだから……。

今野 ベルリンまでです。

B氏 中国のそういう昔からの思想というか、国民全体がまだそういう意識を持っているんですか。

今野 みんな持っていますよ。

B氏 そうですか。

今野 JICAから、日本のまるまる100%補助のカネで、中国は西部開発と言ってきている。それで、西部は地域格差が大きい。その地域格差が大きいところの地方都市はさらにどうなるのか、大きい都市はまだ面倒を見られるけれど - - ということ、JICAの北京事務所が問題意識を強く持って中国政府

に働きかけて、中国政府はその点の政策をきっちり国土政策で持つべきだろうということになって、それじゃあとって J I C A の北京事務所が来て 1 年間 2 億円くらいのカネをくれたんです。それで僕に声がかかってきて、委員長になれと。それでなったんです。

なったら、途中で入院してしまったから、星野さんに助けてもらったけれども、最後の集結式には行った。もう生意気も甚だしくて、日本のカネで 100% いろいろやって、日本の地方都市の経験をじっくり話せば参考になって、これに対しての答えになるだろうと思って一生懸命それをやろうとって、委員も組んだりしたけれども、北京に行ってみたら、第何次全人代があって、その結果基本計画はこういうふうに決まったから、まずそれを聞けという。僕たちは中国の経済計画を聞きに行ったんじゃないと思って、もう頭に来ちゃってね。それからもう熱はなくなった。学びたいやつはまず素直に先輩の苦労した話をよく聞けという気になりました。

A 氏 いまやっているけれども、北京政府の西部地域問題を手伝えという意識だから、例えばこちらが西部のほうと直接コンタクトを取ると、北京から直ちにクレームが来て、「直接やるな、全部北京を通せ」と。北京との関係だというのが非常に強いですね。

C 氏 向こうは地方自治はないですからね。首長はみんな共産党中央から派遣されて行くわけですから。

B 氏 ソ連と中国との関連ではそういう思想的なものは……。

今野 これがまた深刻なんです。

B 氏 中国は北狄な主張をするんですか。

今野 ええ。中国のお手伝いをし出したら、あるとき、図們江の河口問題を見てくれというわけで、わざわざあそこの果てまで、ウラジオが眺められるところまで連れて行かれたんです。そして、「我々は、このわずかたった15キロをロシアにふさがれて150年、この苦しみは同じ東洋人である日本人にしかわからないだろう」とかいうところから説明するんです（笑）。ものすごいもんですよ。

C氏 似たような話で、上海かどこかの橋をソ連の援助で途中までやっていたけれども、投げ出されて、あとはわが民族が完成したとって自慢してますよね。

今野 ここに港湾をつくる予定だけれども、今野先生は港湾専門だから、それもあるから来てくれというわけで行ったのですが、図們江がなぜ港湾が具体化しないかという、図們江の河口に鉄道橋があるんです。その鉄道橋は、ソ連が朝鮮戦役のときに軍事援助をするためにつくった鉄道です。だから、北朝鮮からすると北朝鮮建国の最大のシンボルなんです。ソ連と中国がこの鉄道を通して我々を支援してくれた、と。それを変えることができないのです。

ところが、カネがない国がやったものだから - - もちろん、こういう事態になるなんて予測もしていなかっただろうけれども、桁下が低くて船を通せないのです。それが最大のネックになっています。あれは日本だったら、すぐ高い橋梁にするとかね。

B氏 あれは金森（久雄）さんが熱心でしたね。

今野 金森さんはわからなかったのだと思います。だから、どうしてもこの橋梁は建国のシンボルでいじれないとしたら、バージで輸送するかと。日本と北朝鮮、中国の間の輸送はプッシャーバージでやれば送れる。ライン川の事例から言って最大2,000トンだから、日本海に行くのだったら4,000トンくらいの

バージでやれるから、変な船をつくるよりよっぽどいいし、いま天気予報の精度がものすごく高くなったから、明日荒れるか荒れないかなんていうのは適切に予報できる。プッシャーバージでも2日かからないで日本に来てしまいますから - - と言ったんだけど、とにかくあそこは自由に絵を描けない地域なんです。

**B氏** 3国が絡むわけですね。

**C氏** それで頓挫しているんですか。一時期、随分盛り上がっていましたよね。3国のちょうど境界線で。

**今野** 百年オーダーでいけばいずれ解決するでしょうけれども、当面の話としては。

**B氏** それで新潟も富山も環日本海という、それにやや引きずられた発想が。

**今野** だけど、貿易量はそのためにウラジオの貿易も下がりっ放しです。どうしょうもない。歴史とか地政学だけでは解決しない問題が現実問題としてあそこにある。しかし、その背景にはこういう長い歴史があって、我々はヨーロッパ経由で西洋史を習っているから、イワン大帝なんていうのは大英雄のようだけど、中国ではクソミソです。

**A氏** 日本の天気予報は昔、中国の気象情報が入らないで非常に困ったんです。いま、あれは国際条約で入ることになっているのですか。それとも上から撮っているのですか。

**今野** 上から撮っています。私も気象予報士的な素養を持っているんですよ。そのために1週間、気象庁に研修に行ったんです。その頃は全くいまみたいな

データはなくて、ラジオで放送したんです。「どこどこ、西の風、風力幾ら」と。

D氏 いまでもその放送はありますよ。

今野 それを聞いてパッパッと地図に落とせるというのが特技なんです。それと天気図を描くこと。おまえはセンスがある、いい図面を描くといって褒められていたんだけど、いまはもうかないませんわ。写真で雲まで出てしまうから。

A氏 今野先生には失礼だけど、当時は、気象庁の天気予報よりは田舎の農家のおじさんの観天望気のほうが当たったというね（笑）。

今野 そうですよ。これは密度が全然違いますから。

A氏 話がズレますけれども、ヨーロッパの天気予報はものすごく正確だという印象があります。日本よりもずっと正確で、なおかつ、みんなが天気に対する関心が非常に強い。例えばイギリス、フランスそれぞれの国で全体につながっているし、非常に正確です。あれは長年の蓄積ですかね。

今野 いえ、率直に言うと、天気予報の観測とか天気予報を出す技術というのは、日本のほうがむしろ優れています。ただヨーロッパは、ヨーロッパの地形だったから簡単なのです。パリからモスクワまで大平原ですから。あれだったら天気はくずれない、という言葉はおかしいけれども、攪乱されないんです。

B氏 急変しないんですね。

A氏 アメリカとかヨーロッパはそういう点では簡単ですね。

今野 私から見ると、アメリカの天気予報なんかものすごく大ざっぱです。それで当たるんですよ、大平原だから。ところが、日本は山あり谷ありですから。しかも悪いことに、日本海という西側に海があるでしょう。あれがまた天気をごちゃごちゃに複雑にする大もとなんです。あそこから水蒸気を上げて持ってくる。だからヨーロッパの天気は、冬は、アルプスを越えさえすれば晴れている、こっちは晴れない。単純なんですね。

A氏 先ほどの話に戻ると、中華思想というのはアメリカはかなりそれを意識しているような気がしますが。

今野 もちろんしています。ヨーロッパで地政学をまともにやった人は、みんなこれを勉強しますから。

A氏 日本に対するものの見方と、中国に対するものの見方と、同じものの見方でも随分違いますね。アメリカはやはり中華思想的なところを頭に入れて言ってるんですかね。あんな乱暴なブッシュでも、わりと丁寧な言い方をしますよね。

今野 ええ。日本の歴史を振り返って、こういう中華思想を持っている中国を本当に怒らせたのは、一に北条時宗、二に聖徳太子です。「日出処の天子、書を日没処の天子に致す」なんて、とんでもない話ですね。あんなこと言たって何の役にも立たない話。

北条時宗は、日本経済から見て、ものすごい損害を受け、結果として北条政権崩壊を招きました2度の襲来でしょう。

それから、第3に何だったかという豊臣秀吉です。朝鮮事変で、日本人はやっぱり夷、人間じゃないと。こういうのを定着させた最大の犯人は、東条英機ではなくて豊臣秀吉です。それが今日の日中外交の難しさなんだけど、本当は日本人も張本人なのだから、それを理解しなければいけないんです。

第4が帝国陸軍の大陸に対する甘い見解ですね。病院にいる間ヒマだったから日本史を一生懸命読んだけれども、古代における白村江の戦以降の、本土防衛のための財政支出というのはものすごく苦労しています。

A氏 朝鮮半島は東夷の中には含まれないのですか。

今野 中国から見れば東夷の一つです。だけど、近いところにいるから。第一夫人ですね（笑）。日本は第二夫人だけ。

A氏 ちょっと色が違うんですね。

今野 ええ。だけど、この中華思想は東洋哲学の基礎にあるから、江戸幕府でもみんなこれですよ。この間、東北大の私の1級下で岩手大学の先生がいて、それが学会で発表するというので聞きに行ったけれども、「京都における東北の概念」というのを発表したんです。東北というのは大体よくないんですね、鬼門です。夷と北狄だから。そうしたら、幕末の朝廷が征討軍として詔を下した中に「東北」というのがあって、関ヶ原以北は全部東北です。だから、東北という言葉自体が差別用語なんです。

明治維新になって、教科書策定を明治維新政府の文部省がやって、社会科（地理）の教科書をつくるために地方を分けなくては行けないと。それで東北が勿来の関と白河の関以北に固まった。それまでは東北と言ったときには、北陸も含めて岐阜から愛知からみんな東北だったんです。

C氏 京都から見ればですね。

D氏 東京に政府ができたからそういうふうに線がズレたんですか。

今野 そうです。同じ中華思想でも、江戸幕府の武士の論理と貴族の論理で

また違うんです。

**B氏** だけどその頃、東北を見るのと同じ目で九州なんかもそういう目で見  
ていたわけでしょう。

**今野** もちろん九州も同じです。サントリーにとっては京都から出た企業だ  
から、この思想で行けば東北も九州も同じ熊襲なんです。蛮人なんです。

日本史の話に戻ると、南北朝時代の政治史というのはまさしくこれです。北  
畠親房が東北に下って、九州は九州で南朝軍が勢力を得る。これは結局、中華  
思想の天子がまします京都を取り囲む政治思想はそれがくつつかなくてはいか  
んという形で足利幕府を苦しめたわけです。

**B氏** 確かに高松塚古墳のあの四神にしても、白虎だの何だのって全く同じ  
発想でしょう。

**今野** 後醍醐帝がなぜ吉野へ行ったかというのは、海上交通ルートから言っ  
て東北と九州を結ぶのに最高の紀伊半島を選んだわけでしょう。つながるとこ  
ろ。それを一括して統合司令部で司令を出して、自分の息子を東北と九州に派  
遣したわけです。この地政学的風土が菊池（武光）や薩長の尊皇派が出てきた  
りするわけです。

**A氏** 九州なんか随分荒し回ったんですよね。北方謙三の小説に書いてある  
けれども、菊池が全部助けて、ずっと福岡まで攻め上る。

**今野** それで多々良川の戦いで足利尊氏に敗れたんです。あれに敗けて反抗  
する勢力が弱くなって、安心して足利尊氏は湊川にさかのぼってきて楠木正成  
をやったわけです。

だから日本の歴史も、こういう中国の思想と、これに毒された日本的中華思

想の歴史なんですね。徳川家康の統治理論はみんなそうでしょう、譜代と外様の分け方でも。東海道筋は全部譜代、親藩で押さえて、ここの北東、南北に外様を配置したということです。

日本の歴史で一番の地政学者は徳川家康ですね。やったことがすごい。

A氏 江戸にちゃんと腰を落としたところで日本全体が見えた面があるんですね。

今野 そうですね。それで大きくなったのは頼朝と家康です。それはまだ未開発だけれども、日本列島全体を見ていたと思います。関ヶ原以北が東北だなんて言っているような、こんな見方とは全然違います。まあ、話が脱線しましたけれども、国土問題というのは、歴史的に振り返ったり政治思想史的にあれしていくと、すごくいろいろな問題があります。

もとへ戻りますが、「国家の盛衰とフロンティアの役割」というのを出しました。こういう問題意識を私が持っているというのは中国史の勉強からですが、中国の歴史というのはあるリズムを持って繰り返しているんです。それは、統一国家ができたときはブッと膨れるんです。それで、この統一国家が膨れるだけ膨れて、最盛期になると今度は分権化が起きる。分権化が起きると統一国家の政権は分裂してくるわけです。秦の始皇帝が初めて統一したわけですが、それ以来の2000年の歴史をひもとくと、統一国家がギュッと強くなっていたときと、分裂して分裂国家になっているときの時間層は同じなんです。

ご承知のように統一国家ががっちりしていたのは、秦が始まって隋が起きて唐になって、最後は清。清のあとは中華人民共和国ですね。その周辺に目をやりますと、周辺地域というのは中国に統一国家ができたときに中国の勢力圏に入るわけです。中国に統一国家ができてブッと膨れてくると、中国の領土になるんです。それがどこかというと、いまの中国の国土で言うと東北3省であったり、チベットであったり、シルクロード、新疆がそれぞれ独立する。中国周

辺は漢民族（元、清も含め）の拡大期と衰退期に交互に影響を受ける地域です。私は新疆までジープで行く旅行を林周二先生と一緒にやって、痛感しましたね。したがって彼らを中心にして見ると、中国と非中国との斑（まだら）の歴史なんです。

**B氏** そのときも統一国家に対しては、いわば中華から外れる考え方を持っていたのですか。

**今野** 外れる考え方を持ったと思います。なぜかというと、洛陽の郊外に世界最大の墓、武帝の墓があります。そこに行きますと、武帝の葬式に参列した人が全部出ているんです。

**B氏** ええ、並んでいます。

**今野** その中に外交官の碑があって、124カ国並んでいます。そのときに日本は入っていないんですね。日本から見ると、阿倍仲麻呂とか何かいろいろ行って中国のために帰れなくなったと言っているけれども、あんなものは中国にとってはその辺のノミに食われてくらいの話なんです。彼らはちゃんと外交関係を持っていて、朝貢して、長安の都に屋敷をもらって、それなりの政治権力を、外交上、中国に持っていたわけです。

ところが、北京や西安を基礎とする統一国家が乱れてくると、みんなそれぞれ新疆の国になったり、チベットの国になったりする。いま、チベットが中国共産党によって侵略されていると世界の有識者がみんな言っています。僕はチベットに行ったことはないけれども、いろいろ聞くと、軍隊を使って侵略しているのではなくて、商人を使って都市支配を進め、侵略しているわけです。

**B氏** 漢民族が増えてきたんですね。

今野 漢民族が経済活動を全部押さえている。それが商人で入ってくる。だから、都市は漢民族のほうが多い、農村部はチベット人。ちょうど江戸時代の日本と同じですね。経済を都市が押さえる。周辺の少数民族は自給自足ですから。

A氏 何か取引の対象となるような産物があるんですか。

今野 近代経済の中では、取引になるような産物なんてあまりないわけです。騾馬の毛とかそんなものしかないんだけど、それを商業的に略奪しているわけです、本土から送り込んで売って。

かつて満州語というのは世界の有力な言葉の一つだったでしょう。それは司馬遼太郎が書いていますよ。彼はモンゴル語科出身だから。満州語というのは立派な言葉で、字もあって、文献もいっぱい残っていると。それが完全になくなってしまって満州語を読める国民がいないんです。それは同時に中国人の血が入ってしまった。混血型になっているんです。混血型にして侵略していったというのは、スペインのアメリカ大陸侵略と中国のチベット、新疆、それから満州侵略なんです。そこを日本は、馬鹿だから、軍刀を持たせた兵隊なんかにやらせたものだから世界じゅうの悪者になっているわけです。

慰安婦問題なんか考えてみるとおかしいんですね。日本人の軍隊の性的欲求を満たすために連れて行ったけど、彼らはみんな住民を相手にしてやっているんじゃないかということですよ。それは西安から飛行機で飛んでしまうとわからないんです。僕は西安からジープで行ったでしょう。当時はホテルがないから野宿をしたわけです。そうすると、西へ行けば行くほどそういう形で、しかも商業機能はみんな漢が持っている。よくわかりますよ。

A氏 いま、中国は統一国家になって、しかも経済的にずーっと広がってますね。おっしゃっている流れというのはいまでも続いていて、中国が特に広がっているのは石油ですね。石油関係でいくと例えばイランとか、相当広がっていま

すね。統一国家になるとフロンティアが広がるけれども、その広がり方が、武力で広がるのか経済で広がるのか、いろいろな広がり方があるんでしょうね。

今野 話をまたもとへ戻しますと、国家が統一国家としてまとまって勢力を蓄えたときは必ず広がるんです。日本でもそうなんですよ。こういう見方をしている日本史はないけれども、明治維新政府ができて統一国家ができたら、アイヌが住んでいた北海道を日本人の生活空間の中に入れ込んだ。その前はどうかというと、源頼朝が幕府を建てて、武士政権をがっちりした途端に奥州藤原を倒して東北を全部取りましたね。

そういう話の延長に出雲対近畿の話などもあるわけです。出雲の勢力を近畿がどうやってのみ込んでいったかというので、この間、久し振りに古代史を勉強したけれども、そういう目で見ると面白いですね。統一国家ができることによって勢力が広がるというのは、世界共通の民族生態学なんです。

B氏 だけど、その前には国というものがない……。

今野 国というのはある意味では方便なんです、国という権力組織をつくるのは - - だと思っんです。こういうふうに伸び上がって固まるときに非常に権力の強い中央集権型になって、衰えてきたときにそれが分裂して地方分権型になる。日本の政治世界の中で、いま、地方分権がこれほど大きな声になってきたことはないですね。亡国のもとなんですよ。

江戸幕府だって見ているとそうです。私なんか外様の伊達藩だから、伊達藩から見ていると、江戸幕府を建てたときはとても徳川家康にはかなわないという形でワッとまとまるけれども、だんだん緩んできて、犬公方なんか出てくると全然言うことを聞かなくなってしまうわけです。それは自然なのかもしれませぬね。

そうすると、日本民族が2000年の歴史の中で、固まって大きくなったときと、縮まってきて琉球なんか手を出せなくなってきたということはあるけれども、

それが息をしているわけです。そして、明治維新のときは新しく息をして肺に新しい酸素を送った。いま、それが小さくなってきているわけです。小さくなってきて、次に深呼吸して酸素をいっぱい吸収したときに、どこをフロンティアとして持っているか。

A氏 それは今度の形成計画の東アジア経済圏と関係ありますか。

今野 関係ないです。そんな目先の話とは関係がない。この間、下河辺さんと久し振りに雑談したけれども、海洋は将来の日本民族のフロンティアだ、と。30年前と思想が変わってないね。だけど、その論は、国土計画論を議論するときには重要な課題の一つですよ。

A氏 確かに、いまおっしゃったフロンティア論で五全総の国土軸を眺めると面白いかもしれません。そういう観点で国土軸を見たことはなかったですが、特に西日本国土軸と日本海国土軸というのをやると、確かにフロンティア論と関係するかもしれませんね。

今野 そして下河辺さんは、いまの我々の知識では、海をどのように人間が使いこなせるかということに対して答えを出せる人は誰もいないけれども、必ずやそういうことになるのではなからうかといっています。我々は非常に拙い使い方、埋立で国土を増やして工業をつくったとかいうケチなことだったけれども、この次に日本人が息を吸うときは、「そこをどう獲得するかね」と。まあ、最初からペアを組んでやっていたこともあって心を開いて言ったのかもしれないけれども、いまだに言ってますわ。

A氏 中国のほうから見た日本地図があったでしょう。実はあれは全部字が反対になっていて、普通の地図を逆さまからとっただけだと。

C氏 先ほどの、息をしているという話を考えていたんですけど、源頼朝のときは東北、あるいは明治以降は北海道。そのアナロジーで次は海洋だというときに、一番もとになっている要素は何なのかということ、やはりそれは経済的な資源の獲得ということになるんですか。領土論の話にまた行き着いてしまうのかもしれないですけども、広げることが、要するに資源を獲得するというすごく単純な話なのか、まさにここで言おうとしていたLebens Raumなのかわかりませんが、あるいは位置の持っている価値 - - 領空権なんか僕も僕は位置の価値だと思うのですが、場所を占めているという価値が大事なのか。どういう観点で見ればいいですか。

今野 生意気なことを言うけれども、経済価値や何かもちろん裏付けだけでも、民族生態学だと思います。民族としての共同意識をどれだけの人が持つかということによって、その民族という人間集団が固有の存在になると思うのです。

C氏 日本人を連帯させてきたという意味では、土地がないとコメができないという、要するにコメ文化圏という意味であったと思うんです。これからの話は、海洋となったときの共通の価値観は何なのかということですね。昔、日本民族は海幸彦と山幸彦と全然違う種類の間人間がいたと思うんです。海洋というのは、むしろ忌避する対象、畏れの対象であったものを、いままでの歴史の延長線上でフロンティアとして受け入れることができるのかなという感じがします。

今野 江戸時代300年の歴史をつぶさに、外様大名の周辺地域の仙台とか九州から見るという見方をすると、豊臣秀吉が朝鮮に攻め込んで行って敗けて帰ってきて、その後、中国に清という大国ができてくる。そのときの中国脅威論というのは、思想的には、織田信長、徳川家康に引き継がれて統一しなければという形になったのではないかと僕は思うんです。その結果、幕藩体制ができま

す。幕藩体制ができたときの前期は、徳川家康を神様にまつり上げて全員が平伏している。

それを特に感じるのは、伊達政宗というのは、生まれてくるのが遅かったせいもあったけれども、全国を平定して天皇家を京都から仙台に持ってくると言っていた男で、火事で焼けてなくなったけど、現実に青葉城の中には玉座をつくったんです。そういう立場からものを見るとなんだけれども、豊臣秀吉と徳川家康の締めつけが強くて、ついにはかなわないで、まいりましたということで頭を下げたわけです、傲慢な政宗が。それが小田原攻めのときの話なんです。それ以来、彼は天子ではなくて王が目標になった男なんです。よく「奥州王」なんて言われるけれども。

ところが、幕末になってくるともう徳川幕府の言うことなんか誰も聞かないで、地方でいかに湿田を乾田にしてコメの収量を増やすかということばかりやっていたわけです。それは、藤沢周平の小説『義民が駆ける』という小説にも色濃く出ています。鶴岡藩10万石の農民が、自費で江戸の幕府に陳情に行くなんてすごいパワーだなと思って、もう相手にしてないなと思った。

ところが、それに対して民族共通の危機感が出てくるんです。それがアメリカでありロシアだったわけでしょう。「たった四杯で夜も眠れず」で、危機感を持ってきたわけです。で、危機感があつたときに固まるわけです。

C氏 それとフロンティアとの関係なんですけどね。

今野 そうすると勢力が出てきて、出生率は高くなって、と。それが民族的なパワーになっているのではないか。だから、人口動向が民族的なパワーになっていると説明するとすれば、その辺のメカニズムかもしれませんよね。

D氏 人口波動説ってありますね。

今野 昔からありましたね。

D氏 それはこういうのと連動して。どっちが先なのか、原因か結果かわからないけれども。

今野 だと思っんですけどね。だから次の民族的危機がいつ来るか。アメリカ帝国主義が破綻した後でしょうね。どうですか？

C氏 中国なんかは脅威でしょうね。経済的のみならず、恐らく物理的にも。商業的かもしれないですけども、人が押し寄せてくるなんていうのは十分想定できますね。

今野 10億の人間がいるんだから。

C氏 必ずしも単純労働力だけではなくて、金持ちだってハンパじゃないですから。

A氏 今日の最初の話と関係してきますけれども、フロンティアが人なのか地べたなのかというのが、たぶん国によって違うような感じがします。例えばヨーロッパは、民族という「人」ではないでしょうか。日本の場合は海に囲まれているせいかもしれないけれども、地べたベースでものを考えます。中国というのは多民族国家でしょう。だから、やはり地べたでものを考えているんですかね。

今野 中国は地べた論ではなくて民族論だと思います。

A氏 多民族を一つの中華民族として……。

今野 そうそう。文化とか政権とかですよ。だから、言葉が河南と北京では通じないとかいうのはあまり気にしていないですね。その背景には、民族、中

国人というのがあるけれども……。

C氏 でも、漢民族中心じゃないですか。

今野 そうです、漢民族。それを巧みに中華人民共和国に仕立て上げたデザイナーがすごかったんですよ。それが毛沢東なんでしょうけどね。

A氏 南のほうに行くと、民族が明らかに違うという民族ですね。中華民族という形で、明らかに漢民族とは違う顔つきをしていますね。

B氏 雲南省に行くと、あそこはそうじゃなくても26ぐらい少数民族がいるけれど、漢民族の侵入ということについてかなり危機感がありますね。

今野 そうですよ。新疆もそうです。

B氏 そういう問題が起きてきたものだから、4年ぐらい前から西部開発という開発構想をつくったけれども、あの問題はそこから出ている。そういう文化的なものを壊されまいとするのと、中国にとってはもう一つ、ベトナムや何かと結ぶ経済的なルートを、国としてどうするかという問題と絡んでいると思います。

今野 ただ、あれは名前は西部開発だけれど、西部なんてちっとも開発しないんです。東部開発なんです。中国東部。東部開発のために西部の資源をいかに持ってくるか、という開発計画なんです。

B氏 水も含めてね。

A氏 ただ、西部のほうのウイグル対策はあるんでしょう？

今野 あります。それは、みんな都市から追い出してしまうことですよ。都市的なものは全部漢がやると。それはラサ鉄道に象徴されているわけですけどね。

B氏 順次そういう体制になることに対する警戒感があるんです。

今野 ただ、雲南の人たちともちょっとつき合ったことがあるけれども、あれは結局、日本で言うと長野県ですね。小さい谷沿いで共同社会ができています。

B氏 まあ、そうかもしれませんね。

今野 「薩摩の大提灯」と違うわけです。小提灯なんですよ。小提灯だから少数民族が生き残ったわけです。ところが、北京の論理は中原ですから、大提灯なんです。そこを共産主義という思想統一、イデオロギーがうまく束ねたのだと思います。だから政治的には、そういうふうと考えてくると中国は一党独裁を捨てられないと思います。いずれ、世界と衝突する時が来ると思います。21世紀中ですかね。

そのときに日本をどう建て直すかが、国土計画の本当の意味の正念場かもしれません。

C氏 中央が巨大過ぎますね。あれをコントロールするのは大変ですよ。

A氏 例えば冷戦のときは、冷戦という中で全部ふたをしていたわけですね。冷戦が外れた途端にそこで民族運動が起こってきて、いろいろな紛争が起こってきた。中国の場合は共産主義ということでパッとふたをしたけれども、いまは基本的に外れていますね。そうすると、あれだけのものをどうやって一つの思想で治めていくのかというのは恐ろしく難しいと思います。チベットあたりはもう動き出しているでしょう。

**今野** 毛沢東の赤本、「人民の海」思想を読むとよくわかるけれども、敵はソ連なんです。それが戦車が入ってきたときに中国人民社会をいかに維持するかというと、村落単位で小銃を持ってゲリラをやるという戦さです。経済的にはその裏付けとしてアウタルキー経済を導入する。そのために地方の国土を再編して軍隊組織にして、師団、連隊、大隊、中隊、小隊にしていったわけです。一番小さい単位が集落単位です。集落は小隊長。それ単位でコメをつくらせ、最低限は武器の修理工場を持たせ煉瓦の工場を持たせる。これは一つのコミュニティの基礎だったんです。その人民のものすごい無数の泡の中にのみ込んでしまうんだと、こう書いてあるわけです。

それがロシアがおかしくなってきた、アメリカに接近していったでしょう。最初はロシアが怖いからアメリカへ接近していったのだけれども、アメリカとうまくいくようになったでしょう。だから、論理が崩れて火がついたのが天安門だと思います。天安門をクリアして、ようやく少し自分の道を見つけ出してきて鄧小平まで来た、こう思います。

しかし、最近、そのやり方の反省として、アメリカ帝国主義が非常に気になってしょうがない。最終的にはあれと太平洋上で衝突するのではないかというのは、もっぱら有識者が予測していることです。

**C氏** ただ、宇宙でもすごいです。あれはかなり衝撃的ですよね。スターウォーズ計画の中国版みたいなもの。

**今野** いまの国土形成計画の中ではとても論じられないけれども、日本列島を浮かばせている太平洋がそういう動乱になったときにどういうふうに対応するかというのは、デッド・ディスクッションでもいいけれども、きっちりやっておくべきだと思います。

**C氏** 恐らくそういうことは、いま、日本の政府は想定していないのではないですか。やはり水平分業でうまくやるんだと。少なくともアウタルキーなん

か全然確保されていませんからね。

**今野** その点が少なくとも議論もされていないというのは、政策立案上 - - 当然、政策というのは民主主義社会だから多数意見に従う。しかし、少数意見にどんなものがあるかというのは、気配りした上で多数決しなくてはいけないのに、少数意見として最初からゼロになっているところが事務的な計画に陥っている基礎ではないか、こう思うわけです。

その証拠が、中国共産党がこれだけ伸びて、しかも最大の貿易相手はアメリカとすると、最大の首根っこは津軽海峡。そうしたら、大湊に総監部を移すくらいの政策がなくていいのかと僕はあるところでは言ったらば、政府は自衛艦が来ただけで地域にどのくらいのインパクトありますか、こういう発想です。ちょっと話にならないですね。

国土計画というのはそんなものじゃないと思うんです。あそこをがっちり押さえてあそこを自由に動かせなければ、中国は太平洋に直接出られないのです。第2の出口は宮古島。だから、領空侵犯が起きているのはみんなそこばかりです。あそこを中国に無抵抗に破られてしまったら、日本の将来というのは絵の描きようがないでしょうね。

**C氏** 少なくとも表向き、いまのように戦争論みたいな話を平場ではできないと思うんです。もちろんデッド・ディスカッションかもしれないけれども、そういうものを蓄えた上で結論に持っていくべきなのかもしれないですが、そこはそういう片鱗が見えただけで、もう大騒ぎじゃないですか。

**今野** 大騒ぎですよ。そこは日本の民族社会の弱点だと思います。

**C氏** 恐らくいまの日本の社会は、そういうことは見て見ないふりをしながら、まあ、何とかなるんじゃないかというその場凌ぎなんですね。

A氏 情報公開の基準が少しズレているような感じがします。公開すべきものとすべきでないものを、もうちょっときちんと分けないといけない。国家百年の計の話というのは、後ではいずれ公開するとしても、そのときは全部公開するという話でもないと思うんです。

今野 仙台の経済界の人とこの間ちょっと会ったけれども、浅野批判というのはそういうことでしたね。あの知事は12年間やって何にもやらなかった、やったのは情報公開だけ。情報公開というのは、そのあとに出てくる政策を考えないで、公開していい政策と公開することによって効果が出るものと、そういうものの区別もなしにやっているのではないかということですね。

A氏 変な話で、竹島問題なんて国家の話なのに、地方自治体が先頭に立って騒いでいる。

今野 あれ自体がおかしいね。

A氏 地方の問題じゃないはずですよ。

C氏 ああいうのも、いまはとにかく問題にならないようにそっとしておいて、基本的に事なかれ主義ですね。

A氏 で、中央政府は何も動かないですね。

C氏 日本の外交は一貫してそうなんじゃないですか。拉致問題も、向こうが告白しなければこんなには進展しなかったわけです。

今野 この間、恵比寿で、フランスの文化団体が主催した「東アジア経済圏はどうなるか」というシンポジウムがあったのです。そしたら、韓国からの論

者が明快に言っていました。非常に説得力があったけれども、東アジア経済圏というのは世界の中で重みを増すだろう。しかし、そのリーダーシップだけは日本に取らせたくないと言うんです、東京の真ん中に来て。それは、日本の企業は韓国にもいっぱい出てきていて、自分の会社のことはわかっているけれど、「日本のため」なんてことで動いているところはない。日本の国のために動いているところなんて一つもないのに、ましてやアジア全体の世話なんかできるはずがない。したがって日本にだけはリーダーシップを渡したくない、と言って中国になびいているわけです。

C氏 でも、民間企業の行動原理はそれしかないんじゃないですかね。

今野 でも、それはそう一概に言えないと僕は思うんだな。というのは中国へ行くと、早稲田、慶応に相当する二大大学 - - 中国の大学制度を切りひらいていったのは、国がつくった北京大学と清華大学です。清華大学はアメリカのカネです。天津条約で中国はアメリカにも賠償金を払ったわけです。アメリカは、その賠償金を使って中国に大学をつくって返すと。その賠償金でつくった大学です。

C氏 清華大学というのはそういう大学なんですか。

今野 そうです。だから、中国の欧米系大学と言われているわけです。あるいは、我々の年代ではまさしくそうだけど、奨学金を出してフルブライトとか、あれはみんなアメリカの民間資本ですね。この間まで鉄砲で撃ち合った日本人をあれだけ呼んでやってくれた。そういう民間社会というか、日本の民族社会にはないでしょう。

だから一概に、韓国は自分の立場から好き勝手に日本のことを言っている、というふうに僕は言えなかったですね。

C氏 恐らく日本人国民が国家を語りづらいのと同じように、企業もあまりそういうことを語らない歴史が戦後できているんじゃないですか。

今野 だから「民族社会で」と言うんだけどね。だけど、問題であることは事実だと思うんです。

A氏 新全総とか三全総のときは、国土の地べたの中を考えていたような感じがするんです。五全総くらいになってだんだん国際化になってきて、シーレーンまで含めて国土計画の国土というものを考えなければいけない。フロンティアといいますか、どこまでが国なのかということを考えなければいけないとすると、今度国土計画を考えるときに、考える範囲が違ってきているのではないのでしょうか。

C氏 恐らく意識としてはあると思います。当然、考える対象は海洋まで含めた広い空間で考える。ただ、そのために何をするかというと、何か踏み込めないといいますか、領土問題を国土計画で語っていいのだろうかとか、津軽海峡を横断する船の監視が必要だとか、そんな話も言っていいのだろうか、というはあるのではないですかね。

A氏 公開すべきかどうかは別として、議論だけはやるのでしょうかね。

B氏 フロンティアの問題というのは、領土の広がりでものを発想するというよりは、これから日本が負うべき役割はどうかということを経論しなければいけないでしょうね。

今野 そうですね。

A氏 特にさっきおっしゃっていたフレームワークの話ですけれども、ヨー

ロッパみたいに、EUという形でみんなが一つの経済圏として団結しようという形ではなくて、日本の場合は厄介なのが隣にいるわけです。そこでまだいろいろ噴火口がある可能性があるとする、フレームワークとしてその辺をどう考えるかという話ですね。

**今野** EUの場合は、煎じ詰めるとキリスト教文化圏なんです。だから、イスラム圏の国を入れることの抵抗がトルコ問題になって出ているわけです。その点を考えると、日本はある意味で無宗教集団としては一つなんですね。EUが50年間苦勞してきたのと同じ質の苦勞は、ちょっと違うのかなとも思います。

実は今日、中華思想を話したときに、中国人民全体が日本をどう見ているのかという話がありましたね。そのときの1つの事例で、16億もいる人間の中のたった1人ですから、これが庶民の意向を代弁しているとは思わないけれども、僕は大連理工大学に集中講義に行っていたことがあるんです。1週間講義に来てくれと行って行くと、日本から今野先生が来たからといって、1週間、通訳を専属につけてくれたのです。大連理工大学大学院の日本語科を出た、日本語ペラペラの女の子です。

その女の子が、先生、明日は講義がなくて1日休みになっているけれど、どこへ行かれますかと言うから、旅順に行きたいと言ったんです。そしたら、日本人の方は旅順が好きですね、何で日本人は旅順、旅順と言うんですかというから、実は僕が崇拜している人物として広瀬中佐というのがいる。日露戦争のときに、杉野兵曹長という部下が帰ってこないで心配で、一回日本の船に逃げたけれども、また探しに行って、「杉野はいるかーっ、杉野はいるかーっ！」と、船の中を三回も探し回った。挙げ句にロシアの陸からの砲撃に当たって死んでしまった。

あの軍人は人間の模範とすべき軍人だと思って子供の頃から崇拜していたから、一度でいいから旅順の港を、遠くからでもいいから見たいのと言ったら、「先生、日本人でそんなに人間のことを愛している人がいるんですか」と。それ、どういう意味？ と言ったら、日本人は人間の皮をかぶっている鬼である

と、私たちは小学校のときから習いました。したがって日本人と人間をつけて我々は呼びませんよ、日鬼（にっき）と呼んでいると。

日鬼という思想的背景は中華思想ですよ。中国人は人間だけど、外へ行くほど夷とか蛮人ですから。だから、豊臣秀吉みたいに耳をもいだりすることを平気でやる、いまの日本人も南京で同じことをやったと。

A氏 これは、教育の効果がだんだん薄れるまでは変わらないですかね。

今野 なかなか変わらないでしょうねえ。大変ですよ。

B氏 日本のいまの人口減少化時代、外人を入れるという問題は、向こうの人間にこっちの教育を施して、少しでも日本の方向性についての知識を涵養してもらおうという話ではなくて、人を安く労働力として使うという話でしょう。

今野 人間として扱っていないと思います、現状は。

B氏 既にそれはものすごい数で、モグリも含めて出てきているのと、これをさらに積極化していったらば、日本は文化的にもおかしくなります。日本はその辺について警戒心を持たない。先ほどの話じゃないけど、企業や何かでもまさにコスト的にどうかという経済性だけの議論でやると、デンソーの機密が漏れるだとか何とかというのは日常茶飯事で起きてきますよ。日本は気がついていないだけの話だけど、ああいうことがあって一体日本の安全性なり何なりが保てるのか。

下村博士とだいぶ前にそういう議論をしたときに、下村博士は、日本は海外に投資をすればいいと仰っていました。

いまの国際化の中でそれがいいとは思わないけれども、いまみたいにとにかく労働力を入れるという話は……。ドイツはトルコや何かを入れていたのを、制限しているでしょう。フランスでも禁止しているし、英国もそうです。最も

人口減少地域の北欧3国は、移民を入れていません。フィンランドなんか特にそうです。

そういう状況の中で国の経営をどうするかという問題で、日本もある程度そのブレーキを考えながらやらないと、先ほどの東アジアでの波及というもの、何を波及させるかという、日本の価値がどこにもなくなってしまうと思います。そこら辺も少し考えたほうがいいんじゃないですか。

**今野** その辺は議論として非常に重要な話で、フィンランド対ロシアというのは人口規模にすると20対1です。ところが、中国と日本も間もなく20対1になるわけです。あれを全くバリアフリーにしていったら、みんな中国人ですよ。

**B氏** いま、それこそ北関東のエリアだって万を超える労働者がたくさんいます。それが子供を持ち何を持ちって、集落をつくっていくわけでしょう。それを無制限にやっていくのかなという感じがあるんです。

**今野** ただ、外国人対策というのは非常に難しいんだけど、一つの論点はジェネレーションでしょうね。戦前の交流の時代では、中国人と朝鮮人は大体大阪中心にたまったのです。大阪の実態を見ると、1世は日本のことを馬鹿にしているせいもあって、日本語をしゃべらないです。ところが、2世になると否応なしに日本語をしゃべる人間になっていく。3世になったら王貞治になるわけです。だから、ジェネレーションを越えた形での姿を議論しないとだめなんです。

大学に中国からの留学生がものすごく多いんです。我々だったら、外国に留学に行ったらその外国語を一生懸命勉強しますよね。全然しないです。中国のことばかり。中国人留学生の卒論というのは全部、鄧小平の「南巡講話」から始まるわけです。この中華思想の根深さというのは、民族としてどう扱っていったらいいか、大変な問題だと思いますね。

**B氏** あそこで留学生を入れているんです。向こうの国費で来ていまして、相当な数、もう3,000人を超えていると思いますけれども、大部分は東大に行くわけです。修士ぐらいまで取って日本の企業に数年いて、いま、みんなどんどん向こうに戻されている。その循環ですよ。

それはそれでいい。その連中は日本を恨んでいるという感じではない。ただ、真面目に勉強する連中は旅費も払えないくらいになるんです。それに対してどうしようかというので、いろんなことをやっているんです。

**A氏** 確かに今野先生がおっしゃるように、日本に留学している人たちに「あなた、何しに来たんですか」と言いたくなるのは、日本で研究しているテーマというのが、中国における何とかを日本から勉強するでしょう。なぜ中国で勉強できないか、日本から見たほうが勉強ができるというんだけど、少なくとも日本に来たら、日本と中国との比較でもいいから日本のことをある程度勉強すべきだと思いますね。

**今野** そういう点では、中華思想というのはどうもケツの毛までしみわたってますよ。

**B氏** 中華思想でもいいけれども、日本が入れる場合の方法というのを、日本として何か考え方がなくてはいけないですね。

**今野** そうです。要は日本がだらしがないのです。

**B氏** 高校生交流とか教職員交流とか、中曽根対策以来、大変な数を一生懸命入れているでしょう。その成果をどこかで評価させたらいいと思いますね。それで将来どういうふうにするかということを考えないと。近隣、援助国等も含めて、日本は経済でいままで順調に来たから、その延長線上でというのは...、今度は相手はみんな競争国家ですから、そのときに何を考えておくかはや

はり必要だと思います。

C氏 そのためには、まず日本人そのものが自分たちの文化とか、みずからの歴史を真摯に学ばないといけないのではないですか。要するに語るものがないですよ。日本人が中国人にこういうことを教えてやろう、というようなものがないですよ。

B氏 それは必修科目から外したからじゃないですか。

今野 そうです。だけどころなってみると、昔、赤尾敏という、1期だけ当選した極右の国会議員がいましたよね。あの人は、教育を左翼に牛耳られていると50年後、日本は大変なことになるぞと言っていたけれど、当たっていますね。

C氏 まさにそうですよね。日教組の先生たちは近代史を特に教えないんです。一番大事なところなのに。

今野 経済学部の経済学の中での基本論、経済理論とか経済政策とか、僕が教えていた地域経済論とか経済地理とかは枝葉の話でしょう。枝葉の話を教えても、資本主義経済とは何かというのを彼らは一回も習ってきていないんです、実質は。

A氏 地べたベースから、シーレーンまで含めてもっと大きく考えるときに、ものすごくいろいろ周辺が変わっていますから、それを踏まえて国土計画をつくらなければいけないかなとつくづく思います。少なくとももうちょっと議論すべきですね。(了)